

九月の俳句

(2 0 2 0 / 0 9)



目次

たべもの俳句	モノクロ俳句	歳時記俳句
15	9	1
↳	↳	↳

秋の夜は長く、「長月」や「夜長月（よながつき）」とよばれます。ほかにも、9月9日の重陽の節句（別名：菊の節句）にちなみ「菊月」ともよばれます。

23日頃の「秋分の日」を境に昼と夜の長さが逆転し、暑さも少しずつ和らぎます。これが「暑さ寒さも彼岸まで」といわれる理由です。

(宇佐美保幸)メール・zeirisi777usami@aol.com

毎日の俳句は次のブログに
鶯鳴とげぬき徒然俳句
<https://blog-haiku.777usami.com>

見苦しく残暑が残る列島や
仲秋も残暑厳しく句など無理
九月にてほらそれらしく空の色

曼珠沙華へそを曲げたか白き花
曼珠沙華何故か惹かれる幽霊花
曼珠沙華自由奔放赤放つ
彼岸花いつか爆発テロ注意
彼岸花陸橋渡る日が暮れる
もじやもじやの赤鬼ごとく曼珠沙華
赤白黄そしてピンクの彼岸花

台風がそこまで来たぞうねる海
台風に裸婦像果敢立ち向かう

天の川見る人ごとく流れ変え
天の川緋鯉泳がせ攪拌す



秩父路の秋の七草遍路かな
萩揺れて一緒に揺れる我が頭

少年は引きこもり稲光
稲光刃物に反射厨房で

諭されて沈黙するか鶏頭花
鶏頭は発火寸前親爺かな
夕闇に直立不動鶏頭花
宇宙人ごとくに見える鶏頭や

雑草の庭に群れ舞う秋の蚊や
小鳥来る世界遺産の天皇陵
認知症小鳥が来れば笑顔あり

目の奥に秋桜揺れて懐かしむ
秋桜を一輪さして寢室に
秋桜はフルーティストと協奏し



秋桜はそれぞれ孤独一万本
秋桜の一輪だけを試験管
秋桜も牛の乳揺れみな揺れる
コスモスは風の恋人キスをして
私にはキバナコスモス重すぎる

通草の実パカッとむらさき歯が並ぶ
カマキリが首をかしげて人の死後
かまきりを掴みし孫の自慢顔
ツタンカーメンごとき貌して蠮螋や
沈黙し毅然と起立菊の白

役者なら何度死んでも星月夜
見えましか見えねばならぬ星月夜
星月夜すぐにこのままピンコロリ
星月夜男が鼻毛切りにけり
星月夜脳みそ空になる時間
潜水艦ときには浮上星月夜



満月や何か足りない高齢者
満月や今が大切今が好き
満月や既に吾また古代人
満月を眺めて菓飲んでおり
けふの月誰もを許し平和かな

秋の月誘惑されて浮気する
名月やドラマ洗濯廻りけり
尊厳死考える歳に居待月
地蔵にもそして我らに今日の月
満ち欠ける月は永遠希望かな
東京に月光の坂あまたあり

ユーチューブ検索秋へ季香蘭
秋は秋の雀は変わらざる
秋が来て秩父遍路のハイキング
とげ抜きの慈愛の眼秋の水



ロボットが働く新駅秋うらら

癌手術無事に終わりて秋彼岸

羅漢像我が顔探し秋彼岸

腹の中苺大福秋彼岸

水澄めり時に念仏思いだし

水澄めり仏教本を一頁

鈴虫の止みて眠りに落ちにけり
泣き上手松虫鈴虫女たち

コオロギの頭の中を満たすもの
こほろぎのこの貌ありて儂き音

きりぎりすときに頑張り昼に鳴く
きりぎりす働き過ぎだ鳴きやまず

虫の音がはたと止まって恋成就



虫の音が読経に合わせ協奏す
虫の音を宇宙に届け地球かな
虫の夜にブログの原稿ストックし
どれ程の絆求めて虫が啼く
指揮者誰合唱するや虫の声
幻の総理候補や虫の秋

窓開けて部屋の掃除を秋の風
断捨離を決断すれば秋の風

爽やかに改札口で手を振って
爽やかに綿の白シャツ通勤す
爽やかに綿の白シャツ始発バス

白粉花雨後のしづくにうなだれて
にぎやかな白粉花に孤独あり

うるさくてされど快音稲刈機



稲を刈る人を操る朱鷺が空

沈黙も金婚夫婦秋の薔薇

すぐたまるアマゾン空き箱秋の空

だんだんと歩幅大きくうろこ雲

スマホゲーム夢中な男女秋の家

秋夕焼後期高齢めでたいか

「猛犬に注意」誰も来ぬ家秋の昼

この村に友達おらず銀やんま

スポーツ紙脇にはさんで秋競馬

子が描く月はいびつに無月かな

永田町誰が納める秋簾

コロナ禍にテラスで食す秋の風





モロク俳句

モロクし無駄に考え曼珠沙華

モロクし喉は渴いて彼岸花

モロクしこの世あゝの世と曼珠沙華

ナス焼いてモロクすれば指やけど
モロクし焼茄子なにかもの足りず

診断はなべてモロク黍嵐

モロクし目眩ふらつき秋桜も

モロクし秋刀魚だけは上手く焼き

モロクししかし物識り秋刀魚焼く

撫子をいとしくおもうモロクか

モロクし萩のトンネル天国へ

憲法はモロク激し乱れ萩



萩咲いてモーロクすればおとなしく
モーロクしレットル貼られ盗人萩
桔梗見てその夜は夢をモーロクし

モーロクし偲び眺むる藤袴
モーロクしたためらい多く藤袴

秋暑しモーロク男医者通い
モーロクし何を食べたか今朝の秋
モーロクし今日も忘れて秋の風
モーロクし昨日も忘れ秋の風

モーロクし憂いもなく巨峰かな
モーロクし不満に揺れて寝覚草
モーロクしたただ空を見る星月夜
堪えてなおモーロクすれば星月夜
モーロクしうかうか過ぎす月夜かな



モ一ロクし明日分からぬ月仰ぐ
名月もモ一ロクすればただの月
モ一ロクしおへそ眺めて名月や

敬老の日モ一ロクしても地獄耳
蟪蛄のかたち空しくモ一ロクす
首筋がカマキリごとくモ一ロクし

松茸に興味をなくしモ一ロクし
モ一ロクし遠く見ている九月かな
モ一ロクし稲妻ごときに驚かず

割れ落ちて吾はモ一ロク石榴かな
石榴裂けモ一ロクすれば不穏かな
モ一ロクし傾いてゆく案山子かな

西へ行くモ一ロクしたり天の川
モ一ロクしねがわく望み銀河葬



モ一ロクし補陀落目指す天の川

モ一ロクし笑う努力の秋彼岸

秋分の日のモ一ロクしモ一ロクす
モ一ロクし秋分の日の愚かしく

モ一ロクし価値観狂い花カンナ

モ一ロクし不安カンナの黄色咲き
モ一ロクし友の死続くカンナかな

モ一ロクし順序なき世の草の花

モ一ロクし眠るも死ぬも草の花

モ一ロクしこの世の不思議羊雲

モ一ロクし愁思の足りぬ夜を過ごす

モ一ロクし愁思捨て去り生きている
酌むたびにモ一ロク進む良夜かな



きぬかつぎモーロクしても辛子つけ
きぬかつぎモーロクすれど吟醸酒

猫じゃらし己がじゃれてモーロクす
モーロクし屁理屈だけのねこじゃらし
モーロクし涙も涸れて猫じゃらし
罪のなき嘘もモーロク茸鍋





たべもの俳句

厄日過ぐ納豆を混ぜ糸を引き
 厄日過ぐいと伸びやか納豆や
 野分あと食材チエック期限切れ
 干蛸でたこ飯作り野分晴

復興す港賑わす初さんま
 てらてらと銀色かたな秋刀魚かな
 秋刀魚にも化粧塩し焼く煙
 晩酌に秋刀魚はらわたほろにがさ
 男あり秋刀魚を喰らい苦き顔
 秋刀魚焼くなぜか頭もそのままに
 魚好き皿に秋刀魚の骨真すぐ
 ジヤズピアノ秋刀魚に塩をたっぷりと
 秋刀魚の目焼かれ焼かれてまだ睨む
 すり生姜味を深めて秋刀魚寿司



秋鯖の味噌煮の味噌を工夫して
男にもできるぞ味噌煮秋の鯖

枝豆や人はそれぞれ茹で加減

枝豆を平凡に食べ酒を飲み

枝豆も莢からであれば自立する

枝豆にちよんと塩ふりつまみけり

ヒマラヤに枝豆あるかピンク塩

枝豆の塩加減こそ妻の愛

世界旅行世界の塩を枝豆に

枝豆やうわさ話のガード下

秋なすび色を深めてぬか漬けに

くたくたにとろとろ煮付け秋茄子

実が締まり調子合わせて秋なすび

煮て焼いていつまで続く秋茄子や

秋茄子のお尻むっちり肉体派



ぶどう食ふ皮も食ふなり新品種

一房の葡萄をお手に菓師様

葡萄にもオリブかけて秋サラダ

岡山の葡萄の房の届いた日

いくら井少子化憂い喉詰まる

手開きの鰯を焼いて蒲焼井

天井を天の川より帰還して

ごま和へのごまごまごまや宇宙あり

ドーナツの穴の向こうに羊雲

馬鈴薯はほどよく茹でてポテサラに

行く秋やポテトサラダをカレー味

台風がそれてがっかり混ぜご飯



名月やラーメンスープ澄みわたり
満月に醬油を垂らす卵かけ
満月やうどんが箸につるつるん
夫婦して月見バーガー草もみぢ
お月見に臙豆腐と吟醸酒

秋の雨ダブル目玉にピンク塩
秋の夜は句集を胸に吟醸酒

烏賊焼きの列に並んで秋祭り
だし醬油上手に使い秋祭り

水誇るところに有りし新豆腐
栗きんとん秋が到来和菓子屋に

「犯人逮捕」茸を炒め夕ご飯
夕ご飯茸料理をスマホから
椎茸で我慢するなり炊き込みは



豆大福地藏通りも秋暑し

ラ・フランス香りて闇に落ちし人
ラ・フランスくびれをそつとなでてみる
別れ来て別れ来ぬ梨を食べ
話さざるひと日の終わり梨を食べ
梨のこともつと知り足し梨を食べ

舞茸の天ぷらそばや雨催い

新米やあつあつあつ土鍋かな
新米やふかふかになる口の中
新米は豪華絢爛ごま塩で
柔らかき新米洗う感謝して
今年また「新米入荷」トンカツ屋
種のない柿が並んで少子化や

塩むすび角はまわるく鰯雲



贅沢にパフエを注文秋の雲

衣かつぎ辛子醤油で酒をくみ

味噌汁に一口なすや今朝の秋
寝て待てばパンもふわふわ秋の朝
要するに焼鮭味噌汁秋の朝

青ミカン八百屋に並び秋匂う
無月なりきつねうどんに生卵





